

「誤解されることを恐れて」

しかし森田療法については、半わりそのまま放置して、世間の偏見もあり、「ノイローゼ」ということは大嫌いでしたので、結婚するころには森田関係の図書も隠してしまっておりました。そして、その後も嫌疑・誤解恐怖、対人恐怖などから逃がれようとして、森田療法よりも、第三者から神経質症と思われるなくてすむ信仰の方に熱心になっておりました。

しかし症状は固着しており、サラリーマンとして順調にのびてゆくためには、神経質的な自分を会社に知られては困るという恐れもあり、対人緊張的な心の動きを隠そうとして、かえって症状を深めていきました。

会社では、出役して出先から自宅に直接帰るような場合に、仕事をさぼったと思われるまいかと心配したりとか、少しでも疑いや誤解されそうなことから、できるだけ遠ざかろうとしたり、いつも取越苦労をしておりました。自分が好意的に言ったことばが、かえって逆にうけとられたのではないかとかの、取越苦労もたえませんでした。他人が不機嫌な態度をとったりすると、何か誤解されているのではないかとみじめになったり、失礼さに腹を立てたりしました。

そして極端な場合は、自分が疑われたり誤解されたりしていないことを、その人に直接聞いて安心するという気休め行為を、会社でもいく度かしていました。

(続)